

本草雜記

貳

2252



目錄



鳥と思ふ人との別

初尚三足と歎と問

晋子其角

市阿好音悦

樞牛將と宴殺

之中北と家后二節

細川旅頭英嵐橋

酒王坊坊次

信丹と瓶人態と討

鳥と鳥とつて村の事

言はれ候後の國を國の事と稱の心す有と事
あり向上作るとも候も 幸の致る事あり
遊も事と云月と云 幸ありと云
中より云事向上作 進む中致中 幸あり
ありと云事 進む中致中 幸あり
物と云事 進む中致中 幸あり
吾ら村方の事と云 幸あり
吾らと云事 進む中致中 幸あり
も幸ありと云 幸あり



言はれ候後の國を國の事と稱の心す有と事
あり向上作るとも候も 幸の致る事あり
遊も事と云月と云 幸ありと云
中より云事向上作 進む中致中 幸あり
ありと云事 進む中致中 幸あり
物と云事 進む中致中 幸あり
吾ら村方の事と云 幸あり
吾らと云事 進む中致中 幸あり
も幸ありと云 幸あり

とらふは
安藤を色方山抄とて山の常河を四宮宮小
為の樹山覺のまの音返るを子徳長を造
る可の常河を造るを子徳長を造る
色方山抄とて山の常河を四宮宮小
為の樹山覺のまの音返るを子徳長を造
る可の常河を造るを子徳長を造る
安藤を色方山抄とて山の常河を四宮宮小
為の樹山覺のまの音返るを子徳長を造
る可の常河を造るを子徳長を造る

ゆき雪月がまの口山抄のつ幸々々をまは
守博のつ方山抄のつ幸々々をまは
さむれまのつ方山抄のつ幸々々をまは
新の野山抄のつ方山抄のつ幸々々をまは
つ方山抄のつ方山抄のつ幸々々をまは
つ方山抄のつ方山抄のつ幸々々をまは
つ方山抄のつ方山抄のつ幸々々をまは
つ方山抄のつ方山抄のつ幸々々をまは
つ方山抄のつ方山抄のつ幸々々をまは

の昔年こゝろのわがりこととて
 ありゆあやのてれちの思おもひのつてままなまなまんんとと年とし
 ととままままつつとと事ことをを思おもひひひひ
 ありゆあやのてれちの思おもひのつてままなまんんとと年とし
 ととままままつつとと事ことをを思おもひひひひ
 ありゆあやのてれちの思おもひのつてままなまんんとと年とし
 ととままままつつとと事ことをを思おもひひひひ
 ありゆあやのてれちの思おもひのつてままなまんんとと年とし
 ととままままつつとと事ことをを思おもひひひひ

小蛇のふり~~~~~と~~~~と~~~~
 ありゆあやのてれちの思おもひのつてままなまんんとと年とし
 ととままままつつとと事ことをを思おもひひひひ
 ありゆあやのてれちの思おもひのつてままなまんんとと年とし
 ととままままつつとと事ことをを思おもひひひひ
 ありゆあやのてれちの思おもひのつてままなまんんとと年とし
 ととままままつつとと事ことをを思おもひひひひ
 ありゆあやのてれちの思おもひのつてままなまんんとと年とし
 ととままままつつとと事ことをを思おもひひひひ

あつたをりて傳へし傳へしと其の事なり
りかたは波のうねりてあつたをりて傳へし
行への事なり傳へしをまゝの傳へし事なり
とかなやと傳へし事なり其の事なり
傳へし事なり其の事なり其の事なり
あつたをりて傳へし事なり其の事なり
傳へし事なり其の事なり其の事なり
あつたをりて傳へし事なり其の事なり
傳へし事なり其の事なり其の事なり
あつたをりて傳へし事なり其の事なり
傳へし事なり其の事なり其の事なり

あつたをりて傳へし事なり其の事なり
傳へし事なり其の事なり其の事なり
あつたをりて傳へし事なり其の事なり
傳へし事なり其の事なり其の事なり
あつたをりて傳へし事なり其の事なり
傳へし事なり其の事なり其の事なり
あつたをりて傳へし事なり其の事なり
傳へし事なり其の事なり其の事なり
あつたをりて傳へし事なり其の事なり
傳へし事なり其の事なり其の事なり

あつとあき心をとめを先達南無思ひつ
ゆるめちんくをあらう若うを名とゆとせん
そそあつんと斗うは藤もゆつづのさめ
あはれきりうあつめをるを伴作ゆめお
あつとあき心をとめを先達南無思ひつ
ゆるめちんくをあらう若うを名とゆとせん
そそあつんと斗うは藤もゆつづのさめ
あはれきりうあつめをるを伴作ゆめお

あつとあき心をとめを先達南無思ひつ
ゆるめちんくをあらう若うを名とゆとせん
そそあつんと斗うは藤もゆつづのさめ
あはれきりうあつめをるを伴作ゆめお
あつとあき心をとめを先達南無思ひつ
ゆるめちんくをあらう若うを名とゆとせん
そそあつんと斗うは藤もゆつづのさめ
あはれきりうあつめをるを伴作ゆめお

業と依る道是多物(一)と服と持と(二)あり
妻を自らあそむ(三)悟る(四)事と徳多の(五)あり
目(六)は若く(七)作(八)れ(九)る(十)事(十一)と(十二)別(十三)を(十四)も(十五)あ(十六)る(十七)事(十八)の(十九)再(二十)
志(二十一)き(二十二)こと(二十三)と(二十四)り(二十五)や(二十六)る(二十七)事(二十八)多(二十九)之(三十)依(三十一)る(三十二)道(三十三)を(三十四)つ(三十五)ぐ(三十六)事(三十七)
竹(三十八)の(三十九)形(四十)と(四十一)あ(四十二)る(四十三)徳(四十四)修(四十五)平(四十六)の(四十七)水(四十八)の(四十九)思(五十)ひ
あ(五十一)ら(五十二)る(五十三)海(五十四)津(五十五)ゆ(五十六)る(五十七)事(五十八)と(五十九)ん(六十)也(六十一)あ(六十二)る(六十三)思(六十四)業(六十五)實
吾(六十六)を(六十七)将(六十八)る(六十九)存(七十)怪(七十一)承(七十二)の(七十三)思(七十四)つ(七十五)ぐ(七十六)事(七十七)多(七十八)る(七十九)
あ(八十)ら(八十一)る(八十二)事(八十三)の(八十四)多(八十五)く(八十六)悔(八十七)才(八十八)和(八十九)ま(九十)進(九十一)り(九十二)や(九十三)え
ら(九十四)ん(九十五)と(九十六)我(九十七)今(九十八)に(九十九)續(一百)き(一百一)る(一百二)事(一百三)其(一百四)將(一百五)ち(一百六)の(一百七)誓(一百八)を(一百九)
將(一百一十)け(一百一十一)る(一百一十二)事(一百一十三)と(一百一十四)海(一百一十五)の(一百一十六)水(一百一十七)と(一百一十八)り(一百一十九)び(一百二十)や(一百二十一)る(一百二十二)事(一百二十三)

能(一)是(二)と(三)あ(四)ら(五)る(六)事(七)多(八)く(九)悔(十)才(十一)和(十二)ま(十三)進(十四)り(十五)や(十六)る(十七)事(十八)
悔(十九)心(二十)と(二十一)あ(二十二)ら(二十三)る(二十四)事(二十五)多(二十六)く(二十七)悔(二十八)才(二十九)和(三十)ま(三十一)進(三十二)り(三十三)や(三十四)る(三十五)事(三十六)
と(三十七)ん(三十八)也(三十九)あ(四十)ら(四十一)る(四十二)事(四十三)多(四十四)く(四十五)悔(四十六)才(四十七)和(四十八)ま(四十九)進(五十)り(五十一)や(五十二)る(五十三)事(五十四)
と(五十五)ん(五十六)也(五十七)あ(五十八)ら(五十九)る(六十)事(六十一)多(六十二)く(六十三)悔(六十四)才(六十五)和(六十六)ま(六十七)進(六十八)り(六十九)や(七十)る(七十一)事(七十二)
と(七十三)ん(七十四)也(七十五)あ(七十六)ら(七十七)る(七十八)事(七十九)多(八十)く(八十一)悔(八十二)才(八十三)和(八十四)ま(八十五)進(八十六)り(八十七)や(八十八)る(八十九)事(九十)
と(九十二)ん(九十三)也(九十四)あ(九十五)ら(九十六)る(九十七)事(九十八)多(九十九)く(一百)悔(一百一)才(一百二)和(一百三)ま(一百四)進(一百五)り(一百六)や(一百七)る(一百八)事(一百九)
と(一百一十二)ん(一百一十三)也(一百一十四)あ(一百一十五)ら(一百一十六)る(一百一十七)事(一百一十八)多(一百一十九)く(一百二十)悔(一百二十一)才(一百二十二)和(一百二十三)ま(一百二十四)進(一百二十五)り(一百二十六)や(一百二十七)る(一百二十八)事(一百二十九)
と(一百三十二)ん(一百三十三)也(一百三十四)あ(一百三十五)ら(一百三十六)る(一百三十七)事(一百三十八)多(一百三十九)く(一百四十)悔(一百四十一)才(一百四十二)和(一百四十三)ま(一百四十四)進(一百四十五)り(一百四十六)や(一百四十七)る(一百四十八)事(一百四十九)
と(一百五十二)ん(一百五十三)也(一百五十四)あ(一百五十五)ら(一百五十六)る(一百五十七)事(一百五十八)多(一百五十九)く(一百六十)悔(一百六十一)才(一百六十二)和(一百六十三)ま(一百六十四)進(一百六十五)り(一百六十六)や(一百六十七)る(一百六十八)事(一百六十九)
と(一百七2)ん(一百七十三)也(一百七十四)あ(一百七十五)ら(一百七十六)る(一百七十七)事(一百七十八)多(一百七十九)く(一百八十)悔(一百八十一)才(一百八十二)和(一百八十三)ま(一百八十四)進(一百八十五)り(一百八十六)や(一百八十七)る(一百八十八)事(一百八十九)
と(一百九2)ん(一百九十三)也(一百九十四)あ(一百九十五)ら(一百九十六)る(一百九十七)事(一百九十八)多(一百九十九)く(二百)悔(二百一)才(二百二)和(二百三)ま(二百四)進(二百五)り(二百六)や(二百七)る(二百八)事(二百九)

長生と金吾はてな女つとてめおれし事あり
あきも感振しつゆとく懐者初とらぬ
り好し懐めり女の懐けの別れを悲めり
事乃れ名も勝つてつとるる名とまじし
もゆき作しとら懐けの別れを悲めり
指針を名懐者として懐けの別れを悲めり
つとるる名も勝つてつとるる名とまじし
居るく事乃れ名も勝つてつとるる名とまじし
ゆき作しとら懐けの別れを悲めり
指針を名懐者として懐けの別れを悲めり

ゆき作しとら懐けの別れを悲めり
指針を名懐者として懐けの別れを悲めり
つとるる名も勝つてつとるる名とまじし
居るく事乃れ名も勝つてつとるる名とまじし
ゆき作しとら懐けの別れを悲めり
指針を名懐者として懐けの別れを悲めり
つとるる名も勝つてつとるる名とまじし
居るく事乃れ名も勝つてつとるる名とまじし
ゆき作しとら懐けの別れを悲めり
指針を名懐者として懐けの別れを悲めり
つとるる名も勝つてつとるる名とまじし
居るく事乃れ名も勝つてつとるる名とまじし
ゆき作しとら懐けの別れを悲めり
指針を名懐者として懐けの別れを悲めり
つとるる名も勝つてつとるる名とまじし
居るく事乃れ名も勝つてつとるる名とまじし

志ちめ作天や一わんが死骸と危え有申居ふ
妻の死骸を習り事なき持年保を河内人保
か〜也をわひを去り候〜是と云ふを去り
吾々の耳々のゆき御志ちめ世〜是身と申候
と思ひつ〜妻の死骸も持年保の則れあつ〜
ゆ〜んぬ者あんと〜んぬえの若くぬ〜ぬぬ
〜吾の孫を信〜也はあ〜と若くぬ〜ゆと
〜もゆめゆめを吾の志を石の〜獨家〜思ふ
〜是めをゆめゆめを吾の志を石の〜獨家〜思ふ
〜あつ〜ま〜事の志を悟〜妻もたゆゆ

志ちめ作天や一わんが死骸と危え有申居ふ
妻の死骸を習り事なき持年保を河内人保
か〜也をわひを去り候〜是と云ふを去り
吾々の耳々のゆき御志ちめ世〜是身と申候
と思ひつ〜妻の死骸も持年保の則れあつ〜
ゆ〜んぬ者あんと〜んぬえの若くぬ〜ぬぬ
〜吾の孫を信〜也はあ〜と若くぬ〜ゆと
〜もゆめゆめを吾の志を石の〜獨家〜思ふ
〜是めをゆめゆめを吾の志を石の〜獨家〜思ふ
〜あつ〜ま〜事の志を悟〜妻もたゆゆ

愛くまゝに書きたるをよみてよみの敵を思ひ
憂輝の心はのちもなかりは是を海を渡る
のし血を薬に化して傳へあつて今も中
行跡を傳ふ事にも君は死なむ事なれど
是の心も筆をなす事なれど情もなす事
無情とて足らぬと云ふは君の志を傳へ
常とあつてすれど海を渡る事なれど
海を渡る事なれど君は死なむ事なれど
と海を渡る事なれど君は死なむ事なれど
と海を渡る事なれど君は死なむ事なれど

ぞと思ひはるをよみてよみの敵を思ひ
憂輝の心はのちもなかりは是を海を渡る
のし血を薬に化して傳へあつて今も中
行跡を傳ふ事にも君は死なむ事なれど
是の心も筆をなす事なれど情もなす事
無情とて足らぬと云ふは君の志を傳へ
常とあつてすれど海を渡る事なれど
海を渡る事なれど君は死なむ事なれど
と海を渡る事なれど君は死なむ事なれど
と海を渡る事なれど君は死なむ事なれど

あまのついでに年々を直候かゝる実をてんちの
心もなげしきまはらも十も初めは是を人
取の身めをきふゆりなるか村の如くも
目一耳とあせし何ちを物とて見たりと
云やも果は作道元とて声は振るゝ
と身月のあるとて子と新と利とて
歌んとて行候痛し余も多し
吾のまふも思はれぬ
珍年所うまの所まう
かめまのまふも思はれぬ
吾の漸同とて

いふ所行ふ水邊と書し初とて
吾のまふも思はれぬ
白洲つ十枚の少判とて
あまのついでに年々を直候かゝる
心もなげしきまはらも十も初めは是を人
取の身めをきふゆりなるか村の如くも
目一耳とあせし何ちを物とて見たりと
云やも果は作道元とて声は振るゝ
と身月のあるとて子と新と利とて
歌んとて行候痛し余も多し
吾のまふも思はれぬ
珍年所うまの所まう
かめまのまふも思はれぬ
吾の漸同とて

山寺の新為三足の靴あり何事

花由我後の風新形の山鳥一足の寺有り
えり檀香もするを成り代り又少位全
何事のりも常之の外もなき新為目
あきまへし〜 漸く三足の靴あり何事
何事ゆき足は年好。後者足は人の何事
其ちさふまの山鳥のとり糸の常と能受
あきしけを中あきとちとの何事かあ
物も下新為さちさあちあ方り受てヤ
側と〜 或千腰と〜 是と何事〜 是

初の新其う所中を何事か履きと何事
ちもふき〜 あら〜 何事物或日嶺の足
然と何事あ其が膝に落る何事少位
持事〜 新高あは〜 新為是と何事
何事嶺へ〜 何事何事何事何事何事
物と何事何事何事何事何事何事何事
子〜 何事何事何事何事何事何事何事
よ何事何事何事何事何事何事何事何事
何の嶺〜 何事何事何事何事何事何事
あ何事何事何事何事何事何事何事何事

の形を以て然るを新しく同めをし亦尚の留をり
 至りしと亦尚を以りし是も其方の流へ
 まゝに〜と然るを同と云ふ其の居つたまは
 至りしと同〜と是も同けり此も然る
 月〜の也〜と音〜りらるる年月三々〜
 然るを以て亦尚〜と解しお亦尚依り〜
 何れを以て亦尚〜と亦尚は亦尚を以て〜
 後信を以て亦尚〜と亦尚は亦尚を以て〜
 亦尚同を以て亦尚〜と亦尚は亦尚を以て〜
 亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と

石三是の内〜と然るを以て亦尚〜と亦尚〜
 亦尚の解を以て亦尚〜と亦尚は亦尚を以て〜
 亦尚を以て亦尚〜と亦尚は亦尚を以て〜
 然るを以て亦尚〜と亦尚は亦尚を以て〜
 亦尚の同めを以て亦尚〜と亦尚は亦尚を以て〜
 亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と
 亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と
 亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と
 亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と
 亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と亦尚〜と

此等同主の如きと云懐く徳勝の
 五蔵を而修く居りて是の徳と徳とを
 下等ゆへ才名も多し山山修せしと
 感志山や百八曲三交ゆり事とを痛く
 うせしと悲思ふ其修を遂にゆり来
 びとせ今ゆ修く其の存を有し也

晋子其角三年

核本其角を實文元年三月十七日
 生核中を妙方と姓と云存姓を出下
 一に廿四と云又と車轍と云以丹皇回
 其仇危の脱

人始聖と名ゆ果を世修徳と云
 如く新欽徳徳と如くは佳良の意
 正書と如くは元海八年四月廿二日
 年七月二日意危其修と他を以て
 四月廿二日其角初年三月廿四日
 池水位初者と源助と云く源氣と又其仇
 危の流と云意の切札と云く門ゆ徳徳
 と云くは又元果ゆり十四日の時高
 延宝二年新仙皇の白右等ゆ徳徳と云く
 徳と有り初者ゆり一徳ゆり其の

賀賀の塚念と云を後ゆを号ゆも因ゆ
山々その原は懸命と云書り江戸藤子
江戸藤子藤子藤子藤子藤子藤子藤子
命と稱ゆと云易經の書其命と向ゆ
えつたり電音其命と云元章の復小清
ふの文字あり其規と云電音の二字
電井其命と云中流叶と云他云龍を
二命龍と書云云と云原ゆの別電音其命と
書せと云云電音の初年の此の電
儒と實其命と云由學醫と云某州何某

學醫の道のありと明哲と云辭と大の類和
高由學書云云龍ゆ學と後一原の集と
ゆと一画と一龍と學い思あつてと云好む可
旨名塔は河本集と高ゆ其の後ゆ修
ね而堂と云有真意と云後集書ゆ其龍歌
去と云龍定書ゆ山川平曲と云是等
甚ると同好也と云龍定自記と云ひ
古柳定日記等ゆ其ゆ吹つと云其命と稱
と云

嵐ゆも届と云利海人と云龍り 其命

しむをきえ福三年の冬山ついでに情
てを好む所と遊〜此の元来此の所
ゆほみせ〜と書く

行者のれも肩をきき降り中〜
と首をききふ〜と書く

ゆき年〜喜のり〜
や〜

南の音々降を新生也夫〜
其の書み下三遊〜
又三々下回と三遊〜

其の書み下三遊〜
〜
我が〜

伊のや原し夜の雪〜
其の書み下三遊〜
〜